

## 《論 説》

## 変革主体論から見たマルクスの革命論とマルクス主義の革命論

— 発展？ それとも 歪曲？ — (\*)

太 田 仁 樹  
(岡山大学名誉教授)

## はじめに

私は主として第2インター期のマルクス主義を勉強してきました。すなわちレーニンを中心とするロシア・マルクス主義、カウツキーを中心とするドイツ・マルクス主義、レンナーを中心とするオーストロ・マルクス主義を研究対象としてきましたので、マルクス自身の言説を細かく検討する作業は十分にはなしていません。一昨年『論戦 マルクス主義理論史研究』（太田 [2016]）と題する著作を上梓し、第2インター期のマルクス主義を研究してきた先輩や同輩の仕事から学んだものをまとめるとともに、マルクス主義の歴史を通観した上で見えてくるマルクス自身の革命理論の特徴についての私の考えの一部を発表する機会をもちました。ここではその一端を紹介することから議論を始めたいと思います。

## 1. マルクス主義の普及と「プロレタリアート」概念の膨張（インフレーション）

革命の担い手という点に焦点を当てて、マルクスの革命理論と後世のマルクス主義者たちの理論を比較すると、彼らが革命の主体あるいは主導勢力と称している「プロレタリアート（＝労働者階級）」の内容について相当の相違があることが明らかになります。それは「プロレタリアート」概念の膨張（インフレーション）という問題です。

マルクスの主著『資本論』は経済学の書ですが、彼の革命論を基礎付ける著作でもあります。マルクスによれば、プロレタリアート（＝労働者階級）は何よりも資本主義的大工業の発展によって産み出されるもので、資本主義社会の唯一の「墓掘り人」という特権的な位置を占めています。『資本論』で展開されている労働価値論と資本主義的生産の発展の理論は、労働者階級が社会変革において特権的な地位を占めているということを論証する意味を与えられています。労働価値論は、資本主義社会では社会的な再生産の真の担い手が唯一労働者階級であり、資本家と地主はなんらの経済的価値をも産出しない寄生的な存在であるという主張を根拠づけるものであり、資本主義的生産の発展の理論は、中間階級の没落と住民の圧倒的多数のプロレタリア化という両極分解的な社会発展の見通しを与えるもので、「プロレタリアート」すなわち労働者階級以外の被支配的諸階層（小経営者層、小農民層など）が革命において脇役以上のことをなせないという主張を支えるものでした。

エンゲルスは『オイゲン・デューリング氏の科学の変革』（『反デューリング論』）（Engels [1878]）およびそのダイジェスト版の『空想から科学への社会主義の発展』（Engels [1882]）において、プロレタリアートが特権的な革命主体であることを平易に説いています。エンゲルスにとって、労働者階級は当然マルクス主義を受け入れるはずですが、現実のイギリスの労働者階級のなかにマルクス主義は浸透していきませんでした。彼はその理由を「非プロレタリア的（ブルジョア的）な「労働貴族」が労働組合運動を牛耳っていることに求めています。エンゲルスのもう一つの特徴は、自らの見解を「科学的」であり、それに反

対する見解を「非科学的」なものであるとしていることです。これによって、思想上の対立は「科学的」で「プロレタリア的」なマルクス主義と「非科学的」で「非プロレタリア的」な反マルクス主義の対立と把握されます。「プロレタリア的」と「非プロレタリア的」という用語は、「プロレタリアート」は革命的で正義と真理を体現しているという観点から他の潮流を批判するものとして用いられています。このような議論の仕方は、マルクス主義者が権力を獲得した場合には学問的討論が成立しえなくなるという事態を予測させるものです。

カウツキーは、ドイツおよびオーストリアのマルクス主義を代表するだけでなく、エンゲルス亡き後の国際的なマルクス主義陣営の最高権威でした。1891年にドイツ社会民主党は「エルフルト綱領」を採択し、党の理論的立場をマルクス主義的なものに純化しました。カウツキーは『エルフルト綱領解説』（Kautsky [1892]）を執筆し、当時のマルクス主義の到達点を示しています。「綱領」で示された資本主義認識は『資本論』や『反デューリング論』で示されたものと同様のものでした。労働者階級のみが革命主体であるという規定も、マルクスやエンゲルスを忠実に継承するものでした。しかし、当時のドイツでは、『資本論』が想定しているような大工場で働く労働者はごく少数でした。広範な農民層が存在していたし、小規模工場で働く者が多く、職人氣質の抜けない者も多くいました。『解説』で、カウツキーは、マニユファクチュアや手工業で働く職人的労働者も大工業の労働者と思想や感情において一体化できると説いています。また、商業・交通業やその他の職業に従事する人びと、さらに農村労働者、農業労働者、農民をもふくめた農村の「勤労者」は一つの「労働者階級」にとけ込んでいくと指摘しています。「プロレタリアート」概念の膨張（インフレーション）です。こうした概念インフレによって、カウツキーは、ドイツにおいても「先進国」と同様な革命の変革が可能であると主張することができたのです。彼は職人的労働者を、大工業で働く労働者と異質な存在と考えないだけでなく、むしろ資本に対する闘争の先鋒としての役割を担う存在であるとも考えています。

「プロレタリアート」概念の膨張という問題と関わって興味深いのは、カウツキーの農民観です。農民がまだ人口の大きな割合を占めていたドイツでは、農民をどのようにして味方に引き入れるのかということは大きな問題でした。『解説』では農民も「勤労者」として「労働者階級」に合流すると楽観的に説かれていますが、そう簡単に事が運ぶものではありませんでした。カウツキーは『農業問題』（Kautsky [1899]）でこの問題に本格的に取り組みました。彼によれば、農業における小経営は持続的に存在しているように見えるが、小経営の農民は同時に労働力の売り手でもある「土地持ち労働者」となっていて、工業プロレタリア階級と利害を共にするものである。このように、「プロレタリアート」概念の膨張（インフレ）というカウツキーの議論の特徴は農民把握においても現れています。都市の労働者階級は、以上のように把握された「土地持ち労働者」と同盟するのであり、概念インフレによっても労働者とみなすことができない農民は同盟でなく中立化の対象と考えられています。現実の運動においては、マルクス主義は農村にはほとんど浸透できなかったのですが、カウツキーの農民観を検討すると「プロレタリアート」概念の膨張によって現実になんとか切り込もうとする意欲を感じることができます。

マルクス主義は「プロレタリアート」概念の膨張により影響範囲を広げようとしたのですが、現実のドイツ社会民主党の運動のなかで大きな力を持つことはできませんでした。ラサール以来の改良主義的潮流が党内の主流をなし、ドイツの労働者階級の「国民」化を反映した社会民主党の国民政党化が進んでいきました。

1917年のロシアにおけるボリシェヴィキによる政権の獲得と、1918年のドイツ革命の敗北によって、マルクス主義運動の中心はロシアへと移動していきます。その指導者レーニンやトロツキーとカウツキーとの論争はこの移動を象徴するものと見られます。

ロシアはドイツよりも「遅れた」発展段階の社会と考えられてきましたが、マルクス主義の浸透はイギリスやフランスよりも早かったことは注目すべきです。『資本論 第1巻』(1867年)のロシア語訳は、英語訳や仏語訳に先駆けて1872年3月に出版されています。この書物は、ロシア資本主義の評価について革命派内部の論争における規準を与えるものであると受けとめられたのです。1870年代末にナロードニキ運動と袂を分かったプレハノフは、マルクスの理論に依って自らの政治路線を正当化しようとしていました。レーニンは15年ほど遅れてプレハノフに追随して、マルクス主義者に移行しました。

農民ではなくプロレタリア階級が特権的な革命主体であることを強調するのが、ナロードニキに対抗するロシア・マルクス主義の顕著な特徴ですが、ロシアにおける労働者階級の存在はドイツよりもはるかに微小なものでした。ロシアで活動するレーニンにおいては、「プロレタリアート」概念の膨張はカウツキーを上回る必要があったのです。共同体的秩序が強固に残存するロシアの農村に「プロレタリアート」を発見するために、彼は独自の「貧農」概念を創り出しました(Lenin [1903])。農民層を馬の所有頭数に従って分類し、馬3頭以上の所有者＝「富農」、馬2～1頭の所有者＝「中農」、馬の所有のない者＝「貧農」という3種類の範疇を区別して、富農をブルジョア、貧農をプロレタリアと見なしました。このように見ることによって、ブルジョアジーとプロレタリアートという近代的な階級闘争が存在することになり、ロシアの農村にも『資本論』の論理が貫徹していると主張できると考えたのです。

また、レーニンは商品生産と資本主義的生産の差異を重視せず、商品生産の拡大を資本主義的生産と等値することがしばしば見うけられます。このような資本主義発展観は、『ロシアにおける資本主義の発展』(Lenin [1899])において、彼がロシアの資本主義的發展を過大に評価した点に顕著に見られるところです。商品生産の拡大はプロレタリアートの拡大に直線的に結び付けられることになるわけです。

レーニンは、農村における革命主体として「貧農」概念を創り上げたのですが、中農や富農も革命勢力の一翼たりうるという主張をもおこなっています。当面する革命の性質はブルジョア的なものであるという革命の段階規定の論理です。ロシアでは資本主義が着々と進展しているが、前近代・前資本主義的な要素がロシア社会を覆っている。反動的な専制政治(ツァーリズム)と農村における地主の存在である。この前近代的な要素を一掃するのが、当面するロシア革命の課題である。この革命においては都市のブルジョア民主主義派とともに農村の富農および中農も参加できる、というのがレーニンの展望でした。1905年の第1次革命後の時期には、反地主闘争は「アメリカ型」の農業資本主義化を目指すものであり、反地主闘争を担う農民はブルジョアであるという性格付けがなされるまでに至ります(Lenin [1907])。

1917年のボリシェヴィキの権力獲得は、労働者革命、農民革命、民族革命のエネルギーの吸収の上に成し遂げられたものであるといわれます。しかし、3種の革命運動の自立的な展開は許されませんでした。プロレタリアートの特権的立場を主張するマルクス主義は、農民運動や民族運動を取り込むのに当初から無理な論理構成をおこなわざるを得なかったのですが、労働者の運動についても革命党との関係は問題を含むものでした。

ロシアにおけるボリシェヴィキ政権の成立とコミンテルンの形成は、マルクス主義運動を地球的規模のものに成長させました。第2次大戦後にソ連の圧力のもとで「社会主義化」した東欧を除けば、ボリシェヴィキ革命以後にマルクス主義者の政権が成立したのは、ロシアよりも資本主義発展のさらに「遅れ」た植民地、半植民地、従属地域、すなわち世界システムにおける周辺地域においてでした。そこでの社会運動の最大の課題は、在地の伝統的な支配層と世界システムの中核諸国による政治的抑圧と経済的収奪をどう排除するかでした。このような地域において政権奪取に成功したマルクス主義者は、ロシア・マルクス主義ともかなり異なった理論を展開しました。その代表として、中国革命の指導者の毛沢東の所説を検討してみましょう。

毛沢東は、初期の著作『中国社会各階級の分析』（毛 [1926]）で、中国社会の階級構成を検討し、当面する民族解放革命に対する諸階級の態度を分析しています。彼は中国の4億人を以下の5大階級に分類します。(1)大ブルジョア階級100万人は、『資本論』でいう大資本家ではなく、外国資本と密接な関係を持つ買弁資本家を意味します。ここには大地主や軍閥および一部の反動的知識人も含まれます。この階級が民族革命運動における主要な敵になります。(2)中ブルジョア階級400万人。この階級はいわゆる民族資本家階級であり、多くの知識人もこの階級に含まれています。彼らは革命に参加するとは考えられていません。(3)小ブルジョア階級1億5000万人。自作農、小商人、手工業経営者および下級官吏などがこの階級に含まれます。この階級は動搖的ではありますが、革命の波が高揚すれば革命に参加すると考えられています。(4)半プロレタリア階級2億人。半自作農、小作農、貧農、手工業労働者、店員、行商人が含まれます。この階級は革命に参加する傾向のある階級とされます。(5)プロレタリア階級4500万人。この階級には、工業プロレタリア階級200万人、都市苦力300万人、農業プロレタリア階級2000万人、ルンペン・プロレタリア階級2000万人が含まれます。この階級が革命の中核的勢力となります。

工業プロレタリア階級はわずかに200万人、中国4億人の0.5パーセントに過ぎません。マルクスやエンゲルスの階級観に立てば、マルクス主義者による権力獲得は夢想に過ぎないといわざるを得ません。しかし毛沢東は、工業プロレタリア階級以外の(5)のプロレタリア階級も(4)の半プロレタリア階級も、革命に積極的に参加するという点においては、工業プロレタリア階級と区別がないと見なします。カウツキーやレーニンによる「プロレタリアート」概念の膨張が極端にまで推し進められた論理だといえます。この概念膨張によって、「プロレタリアート」は200万人から2億4500万人にまで増大させることが可能になったのです。マルクスが蔑んだルンペン・プロレタリア階級も、非常に勇敢な革命勢力であると評価されています。

さらに、この分類は民族革命という観点からおこなわれたものであるということに注意すべきです。民族革命という点から考えれば、革命への参加の可能な勢力はさらに広範なものになります。非革命勢力と考えられる(1)大ブルジョア階級100万人と(2)中ブルジョア階級400万人、合わせて500万人を除けば、残りの3億9500万人は革命勢力となる可能性があるわけです。これは中国の人口の98.75パーセントが革命勢力になる可能性があるということです。帝国主義列強の蚕食に抵抗する農民国である中国の現実に、マルクス主義の階級理論が強引に接合されているといえます。

20世紀の世界を見渡すと、マルクス主義を自称する体制が成立したのは、ロシア、東欧、それから中国、ヴェトナム、北朝鮮といった東アジア諸国、さらにはキューバ、といったところですが。マルクス主義体制の拡大は1975年のベトナム南部解放を境に退潮の兆しを見せ、1989年から1991年にかけての大変動によってソ連と東欧のマルクス主義体制は崩壊します。

運動としてのマルクス主義は、マルクス存命中はごく限られた影響圏を持っただけであり、第2インター期にはドイツ語圏を中心に広がりを見せますが、その影響がグローバルな規模にまで広がるのは、ボリシェヴィキの指導するコミンテルンの活動を通じてでした。日本のマルクス主義運動は、日本支部（「日本共産党」）を創設しようという1920年代初頭のコミンテルンの働きかけと、それに対する日本の社会主義者の応答のなかで形成されましたが、日本の現実政治においてマルクス主義が影響力を持った時期はほとんどありませんでした。総じて中核および半周辺上層の諸国においてマルクス主義運動が力を持ったのは一時的なものであり、また局部的なものであったといえます。

マルクス主義の拡大のこのような地理的な特徴とマルクス主義者たちの理論内容の特徴とを照らし合わせると、興味ある事実が浮かび上がります。マルクス主義の、そしてマルクス自身の理論によれば、資本主義社会における革命は「先進資本主義国」（＝世界システムの「中核」）における生産力の発展を踏まえ

たものであるはずでした。しかし、マルクス主義者が権力を掌握したのは「後進資本主義国」(＝「半周辺」)と植民地および従属地域(＝「周辺」)においてでした。「プロレタリアート」概念の膨張は、マルクス主義の浸透(棲息)地域のこのような特徴を考えれば納得できるものです。成熟した資本主義社会と資本主義的生産力の担い手である近代的な「プロレタリアート」ではなく、利潤目当ての資本の収奪にさらされている存在であり、それに対する反抗能力を備えているという規定性で概念膨張された「プロレタリアート」を革命主体とする理論であるからこそ、「遅れた社会」である半周辺と周辺における革命理論となり得たのです。

マルクスの理論は、「先進国」(中核)における革命理論であったはずですが、マルクス主義者が勢力を伸張したのは「後進地域」(半周辺と周辺)であり、その理論も周辺に適応したものに变化したということは興味深い歴史的事実です。このような事態に関連してよくいわれるのが、マルクスの理論は「先進国」の西欧的伝統を踏まえたものであるが、ロシアや中国に広まったマルクス主義は西欧的文化の到達点を踏まえない「野蛮」なものであったという議論です。このような説明は相当数の研究者が認めているところです。しかもその場合、正常発展コースとしての「先進国革命」を展望したマルクスと、逸脱した発展コースとしての「後進地域の革命」の実行者としての(ロシアおよび中国の)マルクス主義者を対立的に捉え、マルクス主義者の革命理論はマルクス自身の革命理論から「逸脱」したものであり、それを「歪曲」したものであると主張されることがあります。ここには、マルクス自身と伝統的マルクス主義(中心はロシア・マルクス主義)との断絶を強調することで、ソ連崩壊の衝撃からマルクスを防御したいという「マルクス延命・救済」の願望が見られます。

このような「延命・救済」論においては、正常発展コースを歩んでいたはずの「先進国」では、なぜマルクス主義の思想は浸透できなかったのかという問題の究明が欠落しています。マルクスの社会発展観とそのなかでの「プロレタリアート」の位置付けについて再検討し、「先進国」のなかでマルクスの思想が通用したのか否かを吟味することが必要だといわねばなりません。

## 2. マルクスの社会発展観とプロレタリアートの位置

マルクスにおける革命主体としての「プロレタリアート」の問題は、人類社会の発展についての彼の一般的な見通しと密接に関わっています。マルクスの社会発展観について述べる際に必ず引き合いに出されるのは、『経済学批判』の「序言」で述べられた、「唯物史観の定式」です。

社会の物質的生産諸力は、その発展のある段階で、それらがそれまでその内部で運動してきた既存の生産諸関係と、あるいはその法律的表现にすぎないものである所有諸関係と矛盾するようになる。これらの諸関係は、生産諸力の発展諸形態からその桎梏に一変する。そのときに社会革命の時代が始まる。経済的基礎の変化とともに、巨大な上部構造全体が、あるいは徐々に、あるいは急激にくつがえる。このような諸変革の考察にあたっては、経済的生産諸条件における物質的な、自然科学的に正確に確認できる変革と、それで人間がこの衝突を意識するようになり、これとたたかって決着をつけるところの法律的な、政治的な、宗教的な、芸術的または哲学的な諸形態、簡単にいえばイデオロギー諸形態とをつねに区分しなければならない。ある個人が何であるかをその個人が自分自身を何と考えているかによって判断しないのと同様に、このような変革の時期をその時期の意識から判断することはできないのであって、むしろこの意識を物質的生活の諸矛盾から、社会的生産諸力と生産諸関係とのあいだに現存する衝突から説明しなければならない。一つの社会構成は、それが生産諸力にとって

十分の余地をもち、この生産諸力がすべて発展しきるまでは、けっして没落するものではなく、新しい、さらに高度の生産諸関係は、その物質的生存条件が古い社会自体の胎内で孵化されてしまうまでは、けっして古いものにとって変わることはない。それだから、人間は常に、自分が解決しうる課題だけを自分に提起する。なぜならば、もっと詳しく考察してみると、課題そのものは、その解決の物質的諸条件がすでに存在しているか、または少なくとも生まれつつある場合にだけ発生することがつねに見られるであろうからだ。大づかみにいって、アジア的 (asiatisch), 古代的 (antik), 封建的 (feudal) および近代ブルジョア的 (modern bürgerlich) 生産様式が経済的社会構成のあいつぐ諸時期 (progressive Epochen) として表示されうる。ブルジョア的生産諸関係は、社会的生産過程の最後の敵対的形態 (die letzte antagonistische Form) である。敵対的というのは、個人的敵対という意味ではなく、諸個人の社会的生活諸条件から生じてくる敵対という意味である。しかしブルジョア社会の胎内で発展しつつある生産諸力は、同時にこの敵対の解決のための物質的諸条件をもつくりだす。したがってこの社会構成でもって人間社会の前史は終わる。(Marx [1859] S.8f.)

この「定式」については、様々な議論がなされてきましたが、ここでは私が注意すべきだと考えている点について簡単に述べてみます。前半は人類の歴史の発展の諸段階は生産諸力の発展段階に照応するというもので、俗に「経済発展史観」と呼ばれる内容を展開しています。「経済発展史観」というのはマルクスに批判的な論者が用いることが多いので、マルクス主義者はそのような呼称の使用については批判的なことが多いのですが、マルクスのここでの議論を「経済発展史観」と呼ぶことは必ずしも間違っていないと思います。生産諸力の発展は一定の段階で、既存の生産諸関係と所有諸関係と矛盾するようになり、上部構造全体の転覆を引き起こす。ここで述べられている「巨大な上部構造全体が、あるいは徐々に、あるいは急激にくつがえる」という事態は、プロレタリアートによる革命運動によって実現されるのですが、その運動はプロレタリアートが現存の生産諸関係を凌駕する生産諸力の担い手であることに裏打ちされています。このように抽象的に語られる「上部構造全体の転覆」とは、プロレタリアートによる政権獲得とその政権による生産関係の改造を意味していると考えられます。そのような生産力的内実を持たない小ブルジョアやルンペン・プロレタリアは資本主義における生産諸力の発展に駆逐される側の存在であるがゆえに、彼らが反資本主義的な行動をとったとしても評価されず、「彼ら自身の立場をすてて、プロレタリアートの立場にたつ」(Marx & Engels [1848]) ことが要請される訳です。マルクスによるプロレタリアートの特権的な位置付けには、「唯物史観の定式」が理論的な裏打ちになっているのです。

後半は経済的社会構成の諸時期についての議論であり、この部分をどう解釈するのかを巡って先鋭な論争が展開されたことは周知のことと思われます。特にアジア的生産様式をめぐる論争は、マルクス存命中は未公表だったノート（「資本主義に先行する諸形態」）における共同体論との関連で様々な論議がなされましたが、ここでは、「あいつぐ諸時期」という表現とブルジョア的生産諸関係によって人類史の前史が終わるという表現に注目すべきだと思います。

「アジア的」、「古代的」、「封建的」という最初の3つの時期については、progressivな諸時期と表現されていますが、ここではprogressivは「継起的」という意味ではなく、3類型を一定の価値意識（「自由な人びと」の生成）から序列化したものとしてprogressivという表現を用いているので、「前進的」ぐらいの訳語が適切ではないかと思われます。この場合、4番目の「近代ブルジョア的」な時期は「諸個人の社会的生活諸条件から生じてくる敵対」（社会的敵対）をともなう前史のなかでも最後に位置するという特権的な位置付けになっていることに注意すべきです。社会的敵対の消失した将来社会は、その最後の時期である近代ブルジョア社会のなかで産み出されるプロレタリアートによってのみ建設されるからです。プロレ

タリアートの特権的な位置付けは、近代ブルジョア社会における他の諸階級との比較においてだけでなく、人類史におけるブルジョア社会の特権的な位置付けとも関わっているのです。プロレタリアートは2重の意味で特権化されていると言えます。後に「ザスーリチへの手紙」(Marx [1881])において、ロシア革命の展望において曖昧な回答しかなし得なかったのは、ロシアにおけるプロレタリアートの不在あるいは希少という問題が関わっていました。将来社会を切り開く主体としてのプロレタリアートを必要とするマルクスの社会発展観では、近代ブルジョア社会の安直な「飛び越え」を断言することはできず、『資本論』の適用範囲が地理的に限られたものであること(『フランス語版資本論』)以上のことを回答できなかったのです。2重の意味での特権的な位置を認められたプロレタリアートという問題は、マルクスのロシア論を考える場合にも重要な意味があるのです。

より問題含みなのは、ブルジョアの生産諸関係が社会的生産過程の最後の敵対的形態であるという断言です。マルクスの将来社会構想においては、社会的敵対という意味での利害対立は消滅しているということです。「国家の死滅」という考えはこのような将来社会構想と照応しています。この問題は『ゴータ綱領批判』における「共産主義の第2段階」の問題とも関連していますが、社会的利害対立がなければ、法もないし国家という存在もあり得ないという認識に帰結します。マルクスの将来社会像の中には、対立的利害関係の調整の場としての法的諸関係の存在する余地はありません。法とか国家とかいう制度は将来社会には必要がないのです。ホップズやロックなどの近代政治思想は、対立する利害を持つ諸個人がどのようにして共存しうるか(「自然状態」の克服)、共存を可能にする制度的な枠組みをいかに設計するのかを追究するものでしたが、マルクスにはそのような問題意識は消失しています。諸個人の社会的対立そのものが消滅する社会においては、対立を調整する制度は必要ないからです。

マルクスの構想した将来社会は利害対立のない社会なのだから、無秩序な混乱した社会ではなく、秩序の保たれた社会ではあるが、法も国家も存在しないという意味で「無法・無国家共同体」と呼ぶべき性格の社会であったといえます。したがって彼らの思想は「無法・無国家共同体思想」と呼ばれるのが相応しいもので、生産力の発展とともに複雑な利害対立を内包せざるをえない人間社会の現実から遊離したユートピアでというべきものでした。それは低い生産力段階に照応する共同体と高度な生産力の発展とが共存する奇妙な夢の世界だったといえましょう。

ついでながら、マルクスの将来社会構想を「市民社会の再建」であると主張する一部の論者の見方について考えてみましょう。ヨーロッパ史において、またヨーロッパ政治思想史において、「市民社会」はその内部に利害の対立する諸集団が併存する場を意味しています。そのような対立する利害の衝突と調整の場としての市民社会は、国家の存在とその権力行使のチェック・システムとしての法制度の存在を前提しています。この意味でマルクスの構想した「無法・無国家共同体」を「市民社会の再建」であると主張するのは、マルクスの思想の正確な理解を妨げるものでしかありません。

将来社会を利害の異なる敵対的な対立のない社会として想定する人びとが政権を握ると、その政権と反対者の間には妥協の余地がなくなり、物理的な消滅が問題解決の唯一の手段となる事態が生じる可能性があります。現実のマルクス主義運動の中では、戦時共産主義期のポリシェヴィキ、中国のプロレタリア文化大革命期での一部文革派の行動に、敵対者の物理的消滅による問題の解消という方策の実行が見られました。これらの事態は、ブルジョア社会の次には敵対性のない社会が到来するというマルクスの思想の現実化であったということもできます。近代ブルジョア社会が人類の前史の最終時期であるという社会発展観は実践活動におけるこのような問題を引き起こす可能性を内包するものであったのです。「プロレタリアート」による革命というマルクスの展望には、「無法・無国家共同体」の夢を内包する限り、獲得した権力の行使には、戦術的配慮以外の歯止めはないものであるといわざるを得ないものでした。

上記のように定式化されるマルクスの歴史認識が確立されたのはエンゲルスとの共著草稿『ドイツ・イデオロギー』（1845年）の頃だとされていますが、明確な形で公にされたのは両者の共著『共産党宣言』であるといえましょう。そこではプロレタリアートの革命性が強調され、他の被支配階級との比較でプロレタリアートの特権的位置が主張されています。

今日ブルジョアジーに対立しているすべての階級のうちに、プロレタリアートだけが真に革命的な階級である。その他の階級は、大工業の発展とともに衰え、没落する。プロレタリアートは大工業の特有の産物である。／中間身分、すなわち商工業者や、小商人や、手工業者や農民、この人びとがブルジョアジーとたたかうのは、すべて中間身分としての自分の存在を没落から守るためである。〔中略〕もし彼らが革命的になることがあるとすれば、それは、彼らがプロレタリアートのなかに落ちこむ時がせまっていることをさとした場合であり、彼らの現在の利益ではなしに、未来の利益を守る場合であり、彼ら自身の立場をすてて、プロレタリアートの立場にたつ場合である。／ルンペン・プロレタリアート、旧社会の最下層のこの受動的な腐敗分子は、ときどきプロレタリア革命によって運動に巻き込まれるが、その生活上の地位全体からみて、むしろ喜んで反動的陰謀に買収されるであろう。(Marx & Engels [1848] S.472)

プロレタリアート以外の反ブルジョアの諸勢力が革命闘争への参加の可能性が認められているが、それはかれらが現在の利益を放棄することによってのみ可能であるとされていることに、革命運動におけるプロレタリアートの特権的位置付けが如実に現れています。ルンペン・プロレタリアートにいたっては、反動的陰謀に巻き込まれる可能性の方が大きいとされています。

マルクスの革命戦略について、S.ムーアは「永続革命」－「少数者革命」、 「増大する窮乏」－「多数者革命」、 「競争する諸体系」－「改良主義」の3種のパターンを区別して論じていますし (Moor [1963]), 飯田鼎はマルクスの革命論における改良と革命の関係を跡付け、改良闘争の独自の意義を無視する「革命主義」と革命を忌避する「改良主義」をともにマルクスが排除し、改良闘争と革命闘争は「弁証法的統一」がなされていたと主張しています (飯田 [1966] 282頁)。しかし『共産党宣言』は、プロレタリアートの闘争が革命となって爆発することが資本主義的生産力の発展の必然的帰結であることを明確に宣言して、革命主義的展望を明らかにしています。

われわれは、プロレタリアートの発展の最も一般的な諸段階を略述して、現存の社会の内部における多かれ少なかれ隠された内乱のあとをたどり、ついにそれが公然たる革命となって爆発し、プロレタリアートがブルジョアジーを暴力的に打倒して自分の支配を打ち立てるところまで、到達した。(Marx & Engels [1848] S.473)

革命主義的な展望はいわゆる「初期マルクス」の文献においても表明されています。「ヘーゲル法哲学批判序説」の末尾でマルクスは次のように述べています。

ドイツの解放の積極的な可能性はどこにあるのか？／解答。それはラディカルな鎖につながれたひとつの階級の形成のうちにある。〔中略〕社会のあらゆる領域から自分を解放し、それを通じて社会の他のあらゆる領域を解放することなしには、自分を解放することのできない一領域、ひとことではえば、人間の完全な喪失であり、したがってただ人間の完全な回復によってだけ自分自身をかちとるこ



とのできる領域、こういった一つの領域の形成のうちにあるのである。社会のこうした解消をある特殊な身分として体現したものが、それがプロレタリアートである。(Marx [1844] S.390)

ここには、現実の社会状況についての具体的な分析はなく、レトリックがあるのみですが、人間の完全な喪失であり、完全な回復によってのみ自分自身を勝ち取ることができるという「プロレタリアート」には改良闘争の余地はありません。典型的な革命主義の表出ということができます。ここでのプロレタリアートはルンペン・プロレタリア的な臭いのするものです。初期マルクスにおけるプロレタリアート論は極めて理念的・修辞的なものでしたが、その闘争が「内乱をつうじて公然たる革命へと爆発」という革命主義はしっかりと定位していたのです。

『資本論 第1巻』の末尾においては、資本の集中による大規模生産の普及が労働の社会化を推し進め、結果としてプロレタリアートによる政権の獲得と私的所有制の廃棄をもたらすことが現実の歴史的過程の分析を踏まえて展望されています。

いつでも一人の資本家が多くの資本家を打ち倒す。この集中、すなわち少数の資本家による多数の資本家の収奪と手を携えて、ますます大きくなる規模での労働過程の協業的形態、科学的意識的な技術的応用、土地の計画的利用、共同的にしか使えない労働手段への労働手段の転化、結合的社会労働の生産手段の生産手段としての使用によるすべての生産手段の節約、世界市場の網のなかへの世界各国の組み入れが発展し、したがってまた資本主義体制の国際的性格が発展する。この転化過程のいっさいの利益を横領し独占する大資本家の数が絶えず減ってゆくにつれて、貧困、抑圧、隷属、墮落、搾取はますます増大してゆくが、しかしまた、絶えず膨張しながら資本主義的生産過程そのものの機構によって訓練され結合され組織される労働者階級の反抗もまた増大してゆく。資本独占は、それとともに開花しそれのもとで開花したこの生産様式の桎梏となる。生産手段の集中も労働の社会化もそれがその資本主義的な外皮とは調和できなくなる一点に到達する。そこで外皮は爆破される。資本主義的私有の最期を告げる鐘が鳴る。収奪者が収奪される。(Marx [1867] S.472)

『資本論 第1巻』の結論部分の「最期を告げる鐘」の条りですが、ここで述べられているプロレタリアートによる「収奪者からの収奪」は、『共産党宣言』における「公然たる革命の爆発」という革命主義路線がこの時期のマルクスのなかでも堅持されていることを示しています。

### 3. マルクスの革命戦略とイギリス労働者階級の革命性について

マルクスとエンゲルスの世界革命の展望では、先頭に立つのはイギリスであったり、フランスであったりするわけですが、経済学研究の深化とともに、イギリスの重要性が強調されるようになります。『資本論 第1巻』への「序文」においては次のように述べられています。

この著作で私が研究しなければならないのは、資本主義的生産様式であり、これに対応する生産関係と交易関係である。その典型的な場所は、今日までのところでは、イギリスである。これこそは、イギリスが私の理論的展開の主要な例解として役立つことの原因なのである。[中略] / 資本主義的生産の自然法則から生ずる社会的な敵対関係の発展度の高低が、それ自体として問題になるのではない。この法則そのもの、鉄の必然性をもって作用し自分をつらぬくこの傾向、これが問題なのである。

産業の発展のより高い国は、その発展のより低い国自身の未来の姿を示しているだけである。(Marx [1867] S.14)

しかし、マルクスが経済学研究に打ち込んでいた時期のイギリスにおける労働者階級の運動は「革命的」と呼ぶことのできるものではありませんでした。ホブズボームは、イギリスの労働者の歴史を3つの時期に分けていますが(Hobsbawm [1964])、それによると第1の時期(1780年代-1840年代)は「産業革命」の古典的な時代で、この時期に近代労働者階級の誕生が見られます。第2の時期(1840年代-90年代)は、資本主義が至高のものとして支配する時期で、「労働貴族層」の古典的時代です。第3の時期(1890年代-1939年)は帝国主義と独占の時代と見なされています。マルクスがロンドンで研究に打ち込みつつ、第1インターナショナルに関わっていたのは第2の「労働貴族層」の古典的時代です。「労働貴族層」とはホブズボームがエンゲルスを踏襲して用いている用語ですが、レーニン『帝国主義論』(Lenin [1917])における「労働貴族」概念とは若干違ったものです。この労働貴族層によって展開された「新型組合」運動はイギリスの労働者の運動の体制内化を表すものでした。

『共産党宣言』でマルクスとエンゲルスは、「労働者は祖国を持たない。持っていないものは取り上げることはできない。プロレタリアートは、まず持って政治的支配を獲得して、国民的な階級の地位にのほり、みずからを国民としなければならない」(Marx & Engels [1848] S.479)と述べて、資本主義社会において労働者は国民として体制に統合されていない、労働者が国民となるのは、政治的支配を獲得した後であると宣言していますが、資本主義の典型国であるイギリスでは、19世紀の中葉に労働運動は体制内化し、労働者は「国民」として統合されていったのです。イギリス労働運動史研究者の松村高夫によれば、マルクスが変革の担い手とした労働者階級の運動は、1860年代のイギリスでは労働貴族によって主導されていました。それゆえ、第1インターナショナルの「創立宣言」(1864年)は、『共産党宣言』とは異なる社会主義への移行の新たな展望として、労働貴族が指導した10時間労働法を求める運動とともに生産協同組合を高く評価したのです(松村 [1986])。1860年代のマルクスは、政治的实践の場では改良主義的实践を称揚しつつ、社会認識の基礎理論のレベルでは革命主義的展望を語っていたのです。

ここには近代ブルジョア社会に関するマルクスの認識の問題性が現れているといえます。資本主義世界システムの中核においては資本主義的生産様式が支配的になるとともに、その上部構造として「近代的統治」が展開されていきます。「近代的統治」においては、労働者階級は「国民」として体制に統合され、労働運動は体制内の改良運動へと順化されていきます。また、議会制が導入され、労働者が数的に増大し、議会を通じた政権奪取の可能性が開けるかの外観が生じます。

第1インター期のマルクスの労働組合論や生産協同組合論は、イギリスの改良主義的な労働貴族との接近による革命主義の放棄を感じさせるものでした。しかし、資本主義発展のイギリスの労働者の体制内化は、「近代ブルジョア社会」の典型例と見なされることはなく、例外的事情によるものとして処理され、資本主義社会一般に関わる問題として本格的に考察されることはありませんでした。

『共産党宣言』ではマルクスとエンゲルスは、政権奪取以前の労働者を体制に統合されていない(「国民」ではない)存在と見なし、そこに「公然たる革命の爆発」路線(革命主義)の根拠を見いだしました。マルクスは『資本論 第1巻』の結論部分で革命主義の展望を維持しています。国家論を捨象した経済論を展開する『資本論』では、労働者の「国民」化、体制内化の問題は無視され、『共産党宣言』の革命主義が保持されているのです。イギリス労働者階級に関する政治的な時論と基礎理論を展開する『資本論』との間には架橋できない溝があったといわねばなりません。

「先進資本主義国」(中核地域)における改良主義的实践の延長線上に議会を通じた政権獲得という展望

と「公然たる革命の爆発」という革命主義的展望との齟齬は晩年のエンゲルスにも見られます。『『フランスにおける階級闘争』への序文』（Engels [1895]）においては、普通選挙権の獲得による平和的な権力獲得の可能性と「市街戦」による権力獲得という革命主義に立つ路線とが併存しています（Engels [1895] S.521）。マルクスとエンゲルスは両者とも、中核地域における改良闘争の意義を認めることが時とともに増大しますが、改良主義に移行することはなく革命主義の路線を堅持していたといえます。

しかし、実践活動に従事する活動家たちにとっては、改良闘争と革命主義路線とは飯田鼎の説くように「弁証法的統一」がなされることはありませんでした。現実の労働者の改良闘争を「プロレタリアート」の革命的实践に架橋するという両面戦略は、中核地域では成立の余地がなかったのです。日々の改良的实践に従事する活動家たちにとって、マルクスやエンゲルスの革命的言辞とそれを盾にとって運動を過激化しようとする急進主義者たちは運動の障害物でしかありませんでした。他方で急進主義者から見れば、革命を忘れた改良家たちは反動的な日和見主義としか見えないこともまた当然のことでした。

#### 4. 改良運動と革命主義：ドイツの修正主義論争とロシアの党組織論争

改良運動と革命主義の問題をめぐるドイツ語圏（ドイツとオーストリア）の社会民主党内で起きた論争が修正主義論争でした。西欧と中欧の一部での国民統合は、19世紀後半には相当な進展を見せていました。参政権の拡大、社会政策の実施、教育体制の整備、兵役義務の拡大により、労働者階級の国民共同体への帰属意識は高まっています。1914年に世界大戦が勃発したときに労働者を含めた戦時協力体制が構築されたということはこの事情を表しています。既存の政治圏の外部に存在する（「国民」でない）革命主体が既存の国家機構を破砕して自分の権力を樹立するという革命主義の構想は、西欧では（中欧でも）すでに現実性を持たないものになっていたのです。

ドイツやオーストリアでは、労働者階級の国民への統合と革命主義の左翼マルクス主義とが併存していました。ドイツでは、マルクス主義と労働運動は強固に結合し、著しく発展しているように見え、社会民主党は1898年には帝国議会で第2党に躍進しました。オーストリアでも、1897年に社会民主党は帝国議会で2桁の議席を獲得し、国政の場に公然と登場しました。「労働者は祖国を持たない」と述べた『共産党宣言』の論断にも関わらず、労働者たちは既存の国家を前提としつつ、権力獲得以前から「国民」として、権利の獲得と福利の改善を目的とした活動を展開していました。労働運動は、既存の国家体制のなかでも改良を積み重ねるというラサールの路線で前進していたのです（Steinberg [1967]）。

ドイツおよびオーストリアの社会民主党の理論的指導者のカウツキーには、既存の国家権力の外部からの破砕ではなく、既存の国家権力の土俵の上での議会や労働組合や協同組合を通じての改良活動を、マルクスの革命的構想に理論的に結びつけるという、解答不能な難問の解決が課せられていたのです。この難問の解答不能なことを鋭く突いたのがバルンシュタインでした。バルンシュタインは、ドイツの現実の中でマルクスの「プロレタリアート」幻想を維持することが、認識の問題として誤りであるばかりでなく、実践的に有効な政策を阻害する政治的な誤りであると考えました（Bernstein [1899]）。彼の問題提起は、マルクスの棲息していた亡命左翼のなかの狭い党派政治（小政治）においてのみ通用する革命的な言辞からの訣別を主張するものでした。

ドイツ・マルクス主義の左翼知識人たちは、マルクスの革命的言辞を払拭することができませんでした。左翼知識人たちは社会主義鎮圧法時代の、社会から排除された状況のなかで涵養された、既存の政治圏の外部からの革命という発想に固執しましたが、労働運動の指導者たちは、マルクスの「プロレタリアート」幻想とは無縁に、日常的改良闘争に邁進していました。左翼マルクス主義の立場からは、日常的

な改良的課題に徹する現場の組合幹部はまだ許容することができましたが、ベルンシュタインの言動は、改良主義的理論によって革命主義を理論的に解体させる危険なものと感じられました。このような事情が、カウツキーを先頭とするマルクス主義的知識人たちの反ベルンシュタイン感情を刺激したと考えられます。カウツキーは、改良主義への純化を主張するベルンシュタインを攻撃するのの際し、改良闘争と革命主義の矛盾を無視するローザ・ルクセンブルクを差し向けました（Luxemburg [1899]）。オスト・ロイテであったルクセンブルクには、「国民統合」されている労働者大衆にとって革命主義路線が有害無益であったことは理解できませんでした。

ベルンシュタインの問題提起は、「近代的統治」のもとでの革命戦略の問題として受け止められるのではなく、資本主義経済の発展が「崩壊」を導びくという『資本論』における展望を失効させるのか否かという問題に矮小化されて受けとめられました。したがって、資本主義発展段階論を彫琢すること（独占資本主義論の形成）によって反論可能なものであると理解されました。ヒルファディング『金融資本論』（Hilferding [1910]）は、このような意味でのベルンシュタイン批判の代表であり、ブハーリン『帝国主義と世界経済』（Bukharin [1915]）やレーニン『帝国主義論』（Lenin [1917]）はこれを継承したものです。

修正主義批判に関連して、マルクス主義とプロレタリアートとの関係について重要な議論をカウツキーが展開しています。「オーストリア社会民主党の綱領の修正」において、彼は社会主義意識（教義）とプロレタリアートとの関係について次のように述べています。

教義としての社会主義は、プロレタリアートの階級闘争と同様に現代の経済的諸関係に根ざすものであるが、プロレタリアートの階級闘争も資本主義が産み出す大衆窮乏と大衆貧困に対する闘いに発するものである。だが、両方とも相並んで生成するもので、対立して生成するものではなく、様々な前提条件のもとで生成するものである。近代の社会主義意識は、深い学問的洞察を基礎にしてしか存在しえない。実際、現代の経済学が、おそらく現代の技術と同様に、社会主義的生産の前提条件をつくりだすのであって、どんなに望んでも、プロレタリアートはどちらもつくることはできない。だが、学問の担い手は、プロレタリアートではなく、ブルジョアの知識階級である。確かにこの階層の個々の成員の中に近代的社会主義が生成し、彼らを通じて初めて精神的に卓越したプロレタリアに伝えられ、その後、諸事情が許す場合に、プロレタリアートの階級闘争の中に引き入れられた。それゆえ、社会主義的意識は、外部からプロレタリアートの階級闘争に引き入れられるものであり、そこから自生的に生ずるものではない。（Kautsky [1901] 訳, 235頁）

ここでは社会主義的意識（教義）は、「外部から」プロレタリアートの階級闘争に引き入れられると明確に述べられています。マルクス主義者は自らの理論を「プロレタリアートの理論」と称するのが通例ですが、プロレタリアートという存在、あるいはプロレタリアートの階級闘争の外部から社会主義の教義（意識）が引き入れられるという関係にあることをカウツキーは認めているのです。マルクスとエンゲルスが、自らの主張とプロレタリアートとの間にある乖離をいささかも認めようとしなかったことを考えると、「逸脱」ともいえる記述といえます。このカウツキーの議論はレーニンによって取り入れられ、彼の前衛党論の基礎となっていきます。

レーニンは1893年にベテルブルクに移住し、マルクス主義的革命運動を開始しましたが、1895年に逮捕・投獄されるまでは合法マルクス主義者のストルーヴェなどと協力していることからわかるように、修正主義批判という関心はあまりありませんでした。1897年から1900年にかけて流刑に服していましたが、刑

期が終了した後、国外へ亡命し、ロシア社会民主党の再組織に従事します。ここでレーニンが論敵としたのが、経済主義といわれるロシア型の修正主義の潮流でした。レーニンは、『なにをなすべきか？ われわれの運動の焦眉の諸問題』（Lenin [1902]）において、労働者の日常意識は社会主義的なものではなく、労働者の日常闘争の延長線上には社会主義意識はあり得ないと明確に主張しています。この著作は、経済闘争と政治闘争を比較して政治闘争の優位を説いたものだと理解されることがありますが、それは誤解です。労働運動に「外部」から注入される社会主義意識（教義）と結合しない自然成長性への「拝跪」こそ批判の対象だったのです。レーニンはこの論考のなかで、先にあげたカウツキーの文言を引用して、自説を補強しています。

レーニンは1910年頃までは忠実なカウツキー派として振舞っていますから、ここでもカウツキーの論理を全面的に受け入れているように見えます。しかし仔細に検討すると、カウツキーの議論とは若干異なった内容になっています。カウツキーの議論は、社会主義の教義は労働者階級の利害を表現したものであるが歴史的には知識人によって産み出されたものであるという歴史的な事実を述べたもので、マルクスに対する批判は含まれていないのに対し、レーニンの主張は、将来社会の創出と実在する「近代ブルジョア社会」とを「プロレタリアート」という概念でつなごうとしたマルクスに対する批判を内包するものであり、むしろベルンシュタインの認識に重なるものでした。

ロシアにおける労働者が西欧の労働者と比較して未熟であるがゆえに、ロシアの労働者に社会主義的意識を外部から注入する必要がある。だから中央集権的な前衛党とそれによる「外部注入」を必要とされるのであって、レーニンの理論はロシア社会の「後進性」を反映したものであるという解釈が一部の論者からなされることがありますが、レーニンに即しているならばそれはいえません。流刑地中のレーニンは、ウェッブ夫妻の『産業民主制』を熱心に研究しています。「典型的な」資本主義社会イギリスの労働者は、マルクスが夢想したような革命性とは無縁であるということ、レーニンはベルンシュタインとともに見抜いていたのです。彼らはその点で、革命的「プロレタリアート」というマルクスの概念と現実の労働者の乖離をなんとか「理論的に」説明しようと苦勞したカウツキーとは違っていました。

ベルンシュタインは幻想的な「プロレタリアート」概念にこだわることをやめ、現実の労働者の意識に即した運動を重視すべきであることを説いたといえましょう。カウツキーも実践的にはベルンシュタインに追随することになります。レーニンは労働者の現実を「自然発生性」と捉え、克服すべき対象であると考えます。彼にとって、革命的な「プロレタリアート」は革命的な知識人の党によって創り出されるものなのです。革命党こそが「プロレタリアート」なのであり、現実の労働者は革命党によって指導される場合にのみ「プロレタリアート」となりうるのです。逆に言えば、革命党による革命意識の注入という条件をつけて考えることにより、革命運動に参加しうる社会層を大幅に拡大することができたのです。カウツキーによる「プロレタリアート」概念の膨張は、レーニンによってさらに推し進められましたが、一方でレーニンは革命党の理論をつくりあげることで、社会主義意識の「外部注入」を可能にし、希釈化された「プロレタリアート」を革命化することができたのです。レーニンは手工業に毛の生えたような小工場で働く労働者も、馬なし農民の「貧農」も「プロレタリアート」に算入してロシア革命を展望していますが、それは「外部注入」的な革命党の存在によって可能となったのでした。カウツキーが突き当たった改良闘争と革命主義の矛盾は、こうして革命主義の側から克服されることになります。重要なのは、「国民統合」されていない反体制的諸勢力と「外部注入」により「プロレタリアート」を創出できる革命党の存在です。

レーニンによる革命党の役割の拡大強化は、「中国人の98.75パーセントが革命勢力になる可能性」を主張した毛沢東らによってさらに推し進められました。まず現実の労働者階級から独立した革命党（革命的知識人）があって、当面の革命における打倒対象を絞り、革命への参加者の範囲を広げることで革命運動

を構築することが活動の本筋になります。資本主義的生産の成熟とそれが作り出す労働者階級による革命と将来社会の建設という、マルクス自身の展望とは異質の、工業プロレタリアの稀少な半周辺や周辺に適したマルクス主義革命理論の出現です。

## まとめ

「プロレタリアート」概念の膨張（インフレーション）と現実の労働者階級からの革命党の自立という、カウツキーからレーニン、そして毛沢東への革命理論の「変容」は、中核地域から反周辺・周辺へのマルクス主義の拡大という客観的事実の理論内容への反映であったといえるのですが、それはまた、「近代的統治」の定着によって、中核地域における労働者階級の現実がマルクス的な革命主義的路線とかけ離れたものになっているという事情を反映したものであったのです。

マルクス主義は、労働者階級に「プロレタリアート」という特権的な地位を与え、自らをその思想的表現者であると称しました。プロレタリアートは高度に発達した資本主義社会の産物であるのだから、マルクス主義は「先進国革命」の思想であると見なされてきましたが、「近代的統治」が定着した資本主義世界システムの中核地域でマルクス主義が大きな政治勢力になったのは稀なことでした。マルクス主義＝「先進国革命」の思想という思い込みから自由になり、その歴史的展開過程を観察すると、中核地域においては、マルクスの考えたような革命主義的路線が機能する余地はもともとそんなに大きくはなく、しかも資本主義的生産がより発展するほど、ますます小さくなっていったことが分かります。世界大戦というような資本主義世界システムの危機の時期には、革命の時節が到来したかのような外観が現れることがありましたが、その「革命」の主演は「先進国」における革命的な「プロレタリアート」によるものではありませんでした。

マルクス主義者による政権獲得は「後進地域」のみで成功したのであって、「先進国」においてマルクスが望んだ革命が成功することはありませんでした。このパラドックスを読み解く鍵は、マルクスの革命理論の中核にある「プロレタリアート」という概念の非現実性にあったといえます。中核地域（「先進資本主義国」）の現実の労働者は、マルクスの考えたような革命的な「プロレタリアート」ではありませんでした。一方、半周縁と周辺（「後進地域」）では、様々な反システムの諸勢力が革命党の「外部注入」によって「プロレタリアート」に陶冶され、革命的な主体として形成され、革命党の支配が生まれました。

『ロシア社会民主党の組織問題』（Luxemburg [1904]）でレーニンの『なにをなすべきか？』を批判したローザ・ルクセンブルクは、10月革命後には、ポリシェヴィキの統治についてそれが「徒党管理」（Cliquenwirtschaft）になる危惧を表明しています（Luxemburg [1918]）。ロシアや中国で現実化した社会体制は、彼女が呼んだ「徒党管理」であったといえます。「徒党管理」の体制の下では、人々は統治の対象にとどまり、決して統治主体にはなりません。その統治が現実の労働者階級にとってブルジョアの統治よりもよいものであるかどうかは別として、マルクス主義の統治は「徒党管理」として以外には成立し得なかったというのが歴史の現実でした。外部から操作する革命党によって現実の労働者を支配するシステムの形成に対する批判的見解としては彼女の批判は妥当なものであるように見えます。しかし、マルクスの革命主体論の問題点を解明すれば、「徒党管理」は現実社会とマルクスの革命論との矛盾の帰結だともいえます。ルクセンブルクのポリシェヴィキ批判は、問題をマルクスの思想に遡って切開することのできない無力なものであったといわざるを得ません。

マルクス主義運動は20世紀における「反システム運動」の主演でした。マルクス主義は、マルクス自身の革命理論を変容させたのですが、「プロレタリアート」概念の膨張と「外部注入」型の革命党を内容と

する「変容」は、マルクス主義理論の地球規模の拡散にとって重要な役を果たしました。マルクスは特定の社会集団の特権化することで資本主義の崩壊と将来社会の到来を主張し得たのですが、マルクス主義は「変容」を加えた上で「特定の社会集団の特権化」というマルクスの論理を継承することでその「成功」を勝ち得たのです。21世紀において従来型のマルクス主義が行き詰まりを見せているとしても、「マルクスに帰る」ことでは現代の課題に応えることは困難です。従来型のマルクス主義がマルクス自身の理論的弱点を繕うことで「発展」し、人類社会の現実という壁にぶつかったことを考えると、「特定の社会集団の特権化」というマルクスの論理を維持したままで「全人類の解放」を語りうるのか否かが問われているといえましょう。

(\*) 本稿は、2018年12月22日(土)～23日(日)に、法政大学(市ヶ谷)外濠校舎において開催された「関係7学会合同企画 マルクス生誕200年記念国際シンポジウム 21世紀におけるマルクス」において、経済学史学会推薦報告としておこなわれた報告「変革主体論から見たマルクスの革命論とマルクス主義の革命論：発展？それとも歪曲？」を活字化したものです。報告に際して御配慮をいただいた経済学史学会代表幹事の小峯敦氏ならびに常任幹事の竹永進氏に謝意を表します。

#### 参考文献

- Bernstein, Ed. [1899] *Die Voraussetzungen des Sozialismus und die Aufgaben der Sozialdemokratie*, J.H.W. Dietz Nachf.『社会主義の諸前提と社会民主党の任務』佐瀬昌盛訳, ダイアモンド社, 1974年.
- Bukharin, N. [1915] *Mirovoe khaziatstvo i imperialism: Ekonomicheskii ocherk*. Moskva, 1923.『ブハーリン著作集3 世界経済と帝国主義』西田勲・佐藤博訳, 1970年.
- Engels, F. [1878] *Herrn Eugen Dührings Umwälzung der Wissenschaft*. MEW, Bd.20, 1962. オイゲン・デューリング氏の科学の変革, 『マルクス・エンゲルス全集』第20巻, 大月書店, 1968年.
- [1882] *Die Entwicklung des Sozialismus von der Utopie zur Wissenschaft*. MEW, Bd.19, 1962. 空想から科学へ社会主義の発展, 『マルクス・エンゲルス全集』第19巻, 1968年.
- [1895] MEW, Bd.22, 1963. カール・マルクス『フランスにおける階級闘争, 1948年から1850年まで』(1895年版)への序文, 『マルクス・エンゲルス全集』第22巻, 1971年.
- Hilferding, R. [1910] *Das Finanzkapital: eine Studie über die jüngste Entwicklung des Kapitalismus*. Wiener Volksbuchhandlung Ignaz Brand.『金融資本論』岡崎次郎訳, 岩波文庫, 1982年.
- Hobsbawm, E. J. [1964], *Labouring Men: Studies in the History of Laour*, George Weidenfeld and Nicolson.『イギリス労働史研究』鈴木幹久・永井義雄訳, ミネルヴァ書房, 1968年.
- 飯田鼎 [1966]『マルクス主義における革命と改良』御茶の水書房.
- Kautsky, K. [1892] *Das Erfurter Programm: in seinem grundsätzlichen Theil*. Dietz. エルフルト綱領解説, 『世界大思想全集 社会・宗教・科学思想篇14: カウツキー／ブレハーノフ』河出書房, 1955年.
- [1899] *Die Agrarfrage: eine Uebersicht über die Tendenzen der modernen Landwirtschaft und die Agrarpolitik der Sozialdemokratie*, J.H.W. Dietz Nachf.『農業問題: 近代的農業の諸傾向の概観と社会民主党の農業政策』向坂逸郎訳, 岩波文庫, 1946年.
- [1901] *Die Revision des Programms der Sozialdemokratie in Oesterreich*, in *Die Neue Zeit*, Jg. 20. オーストリアにおける社会民主党の綱領の修正, 太田仁樹訳, 『岡山大学経済学会雑誌』49 (3), 2018年.
- Lenin, V. I. [1899] *Razvitiye kapitalizma v Rossii: protsess obrazovaniya vnutrennego rynka dlya krupnoy promyshlennosti*. PSS. t.3, 1971. ロシアにおける資本主義の発展, 『レーニン全集』第3巻, 大月書店, 1954年.
- [1902] *Chto delat? Naboлевshiy voprosy nashogo dvizheniya*. PSS. t.6, 1972. なにをなすべきか? われわれの運動の焦眉の諸問題, 『レーニン全集』第5巻, 1957年.
- [1903] *K derevenskoy bednote: Ob"yasnenie dlya krest'yan, chego khotyat sotsial-demokraty*. PSS. t.7, 1967. 貧農に訴える, 社会民主主義者はなにをのぞんでいるかを, 農民に説明したもの, 『レーニン全集』第6巻, 1954年.
- [1907] *Agrarnaya programm sotsial-demokratii v pervoy russkoy demokraticeskoy revolyutsii 1905-1907 godov*, PSS. t.16, 1973. 1905-1907年の第1次ロシア革命における社会民主党の農業綱領, 『レーニン全集』第13巻, 1955年.
- [1917] *Imperializm, kak vysshaya stadiya kapitalizma. Populyarnyy ocherk*. PSS. t.27, 1969. 資本主義の最高の段階としての帝国主義: 平易な概説, 『レーニン全集』第22巻, 1957年.
- Luxemburg, R. [1899] *Soizlreform oder Revolution?, Rosa Luxemburg Gesammelte Werke*, Bd.1/1, Dietz. 1975. 社会改良か革命か?, 『ローザ・ルクセンブルク選集』第1巻, 現代思潮社, 1962年.
- [1904] *Organisationsfragen der russischen Sozialdemokratie*. *Rosa Luxemburg Gesammelte Werke*, Bd.1/2, Dietz. 1975. ロシア

- 社会民主党の組織問題, 『ローザ・ルクセンブルク選集』第1巻, 現代思潮社, 1962年.
- [1918] Zur russischen Revolution, *Rosa Luxemburg Gesammelte Werke*, Bd.4, Dietz. ロシア革命のために, 『ロシア革命論』伊藤成彦・丸山敬一訳, 論創社, 1985.
- Marx, K. [1844] Zur Kritik der hegelischen Rechtsphilosophie: Einleitung, *MEW*, Bd.1, 1956. ヘーゲル法哲学批判序説, 『マルクス・エンゲルス全集』第1巻, 1959年.
- [1859] Zur Kritik der politischen Ökonomie, *MEW*, Bd.13, 1961. 経済学批判, 『マルクス・エンゲルス全集』第13巻, 1964年.
- [1867] Das Kapital Bd.1 *MEW*, Bd.23, 1962. 資本論第1巻, 『マルクス・エンゲルス全集』第23巻第1分冊, 第23巻第2分冊, 1965年.
- [1875] Kritik des Gothaer Programms, *MEW*, Bd.19, 1962. ゴータ綱領批判, 『マルクス・エンゲルス全集』第19巻, 1968年.
- [1881] Brief an V. I. Zsuzich, *MEW*, Bd.19, 1962. ヴェ・イ・ザスーリチへの手紙, 『マルクス・エンゲルス全集』第19巻, 1968年.
- Marx, K. & Engels, F. [1845] Deutsche Ideologie, *MEW*, Bd.3, 1958. ドイツ・イデオロギー, 『マルクス・エンゲルス全集』第3巻, 1963年.
- [1848] Manifest der kommunistischen Partei, *MEW*, Bd.4, 1959. 共産党宣言, 『マルクス・エンゲルス全集』第4巻, 1960年.
- 松村高夫 [1986] マルクス・労働貴族・生産協同組合, 都築忠七編『イギリス社会主義思想史』II-3, 三省堂.
- 毛沢東 [1926] 中国社会各階級の分析, 『中国共産党史資料集』第2巻, 勁草書房, 1970年.
- Moor, S. W. [1963] *Three Tactics: The Background in Marx*, Monthly Review Press. 『三つの戦術: 革命論の思想的背景』城塚登訳, 岩波書店, 1964年.
- 太田仁樹 [2016] 『論戦 マルクス主義理論史研究』御茶の水書房.
- Steinberg, H. [1967] *Sozialismus und deutsche Sozialdemokratie: zur Ideologie der Partei vor dem I. Weltkrieg*, Verlag für Literatur und Zeitgeschichte. 『社会主義とドイツ社会民主党: 第一次大戦前のドイツ社会民主党のイデオロギー』時永淑・堀川哲訳, 御茶の水書房, 1983年.



# The Revolutionary Forces in Marx's Theory and Marxism: Development? or Distortion?

Yoshiki Ota

Abstract

## 1. Diffusion of Marxism and inflation of the concept “proletariat”

The concept of “proletariat” is the central concept of Marxism. However, its content varies according to times and regions. For Marx and Engels, proletarians are workers who work in the capitalist large industries, they overthrow the rule of capitalists through the revolution and are the subjects of the construction of society in the future. Kautsky put workers in small factories and small farmers into the category of proletariat. Lenin overestimated capitalist development in Russia and included farmers without horses into proletariat. In Mao Zedong, agricultural workers, rumpen, handmade workers, peasants, clerks and peddlers are also allowed to participate in the revolution. The concept of proletariat is inflated. As the region moves away from the center of the world system, the scope of participants in the revolution has been expanded.

## 2. “Proletariat” in Marx's view on social development

In Marx, proletariat is given a privileged position as a revolutionary subject in the capitalist society. In the “formulation” of historical materialism, modern bourgeois society is given a privileged position in human history. Proletariat is privileged in dual sense. In this formulation, there is no social antagonism in the future society that Marx believes. This future society should be called a “community without law and state”. It is recognized that the development of capitalist production increases the number of workers and the ordinary electoral system increases possibilities of acquiring a working-class regime. Still, *Capital* insists that the revolution is inevitable. Marx and Engels never abandoned “revolutionism” throughout their lives.

## 3. Marx's revolutionary strategy and British working class

For Marx and Engels, England is a typical country of capitalistic development, giving models to other countries. However, the English working class in the mid-19th century was not “revolutionary”. The English labor movement during this period had been internalized under the guidance of the “labor aristocrat”. Working class was integrated as “nation”. While cooperating with the reformists politically, Marx was arguing revolutionism in scientific books. While cooperating with the reformists politically, Marx was advocating revolutionism in *Capital*. In modern bourgeois society, it is usual that labor classes are integrated into a system as “nation” and labor movement is to become reformistic, but Marx could not analyze this situation as a problem of upper structure of capitalism in general. In England Marx cooperated with the reformist labor movement, but could not abandon his revolutionism.

#### **4. Reform Movement and Revolutionism: German Revisionism Controversy and Russian Party Organization Controversy**

At the German Social Democratic Party, there was coexistence of reformistic practice and ideology of revolutionism. Kautsky was a personal expression of this coexistence. He adhered to revolutionism, but acknowledged that socialist consciousness was brought into labor movement from the outside historically. Bernstein claimed that revolutionism is an obstacle to workers' reform movement. In the controversy concerning the organization of the Russian Social Democratic Party, from the standpoint of revolutionism, Lenin argued that "external injection" is necessary because the workers' reform movement and the revolutionary socialist movement are not directly connected. The revolutionary forces are not necessarily the product of the capitalist big industry. Those who have abilities to resist the capitalist system, they can participate in the socialist revolution through the "external injection" of the revolutionary party. It can be said that the logic of "external injection" made it possible to disseminate Marxism to the semi-periphery and periphery.

#### **5. Conclusion**

The Marxist revolution theory is understood as the theory of "revolution of developed countries". This is because it assumes the proletariat produced by the capitalist big industry as the revolutionary subject. In the case of Marx, its understanding is correct. However, the successful acquisition of the regime by the Marxist was in "backward countries". It can be said that the key to solving this paradox was in the unreality of the concept of "proletariat" at the core of Marx's revolutionism. Marx's "proletariat" has no realities in the working class in center of modern capitalist world system ("developed capitalist countries"). On the other hand, various anti-systemic forces were formed as a revolutionary subject entity or "proletariat" by "external injection" of the revolutionary parties in semi-periphery and periphery (the "backward areas"). Rosa Luxemburg called as "clique management (Cliquenwirtschaft)" the regime that such forces could acquire. Under the "clique management" system, people remained in the object of governance and never became the subject.